

ひざまくら・1

途中で気づけなかったのは、今考えても情けない。まだまだ子供だったということだろう。

それは太陽が容赦なく照る、暑い暑い夏の日だった。陽の下に立っていると汗が止まらず、腕の表面が汗の塩で白くなってしまうほど、暑い日だった。

最初は、晏而や季翔たちの剣の訓練を見ていた。

季翔はほとんど動物だ。野生の勘で——恐らく、目も耳も鼻もいいのだろう——相手の隙を捉え、長い足を存分に活かした素早い身体の移動、高い身長と長い腕から繰り出される急角度の攻撃で、相手を面白いように翻弄している。対して晏而の剣筋は重い。相手の剣を受け流し、そのまま鋭い一打を放つ。晏而の剣を受けた相手が剣を取り落としたり、その場で降参だと叫んでいるところからすると、相手に重い打撃のようだ。

晏而は凶悪な外見の割に実は面倒見がよいからなのだろう、自身の訓練はそこそこの仲間の指導を始めた。

それが剣など本格的に持ったことのない亮にとつても、なかなか勉強になった。

だって、これは戦なのだ。

花のために、剣も使えるようになっておきたかった。

花は軍の最前線に立つわけではない。けれど戦えないのに、安全な地で隠れていることもしないのだ。

戦況が見える場所で、じっと戦いの行方を見定めようと

している。軍師であればそれは当然なのかもしれないけれど、直接に剣の刃が届くことはないにしても、矢や投石は届く位置だ。

亮も、晏而と季翔も、何度も花に下がるように言った。

花にここで死なれたら困る張宝を始めとした黄巾党の幹部連中も、安全な場所にいるように言った。

それなのに、花は決して引、こうとしない。「ここに立って、見届けることが私の責任だから」と。

花は明らかに戦いを嫌っている。人が死ぬこと、傷つくことを恐れている。それなのに、自分が傷つくことには無頓着だ。

だったら、ボクが花を守る。何者も、花を傷つけることなんて許さない。

そのためには、剣術の勉強も必要だった。

だから、晏而に「おい、亮。見てるだけじゃ身に付かぬぞ。教えてやるから来い」と声をかけられた時、素直に教えてもらうことにした。

剣は危険だからと、木の棒を剣代わりになることになった。

自分の腕で受けた晏而の攻撃は、やっぱり重かった。ずいぶん手加減をしてくれているはずだ。子供相手に大人げない真似をする相手じゃない。

それでも頭を狙って来た晏而の棒を自分の棒で防ぐと、腕が痺れ、棒を取り落としそうになる。

「ぐっ」

唇を噛みしめ、亮はなんとか持ちこたえた。すぐさま晏而の足を狙う。

「お、狙いは悪くねえな」

晏而が軽く腕を振り下ろしただけで、亮の棒は簡単に弾かれる。予測はしていた。次は上段、空いた胸元を狙う。

けれど身体が思うように動かない。思考に比べ、身体ははるかに遅い。

案の定、また簡単に防がれてしまう。晏而の身体が前傾になる。攻撃に移る気だ。

晏而の次の攻撃が来る前に、亮も避けなければならない。晏而の攻撃を何度も受けていると、腕が使えなくなる。棒を回避するべきだ。

けれど、やはり思ったように身体は動かず、次の瞬間、晏而の棒の先端が喉元に突きつけられていた。

「勘は悪くねえんだが、お前はまず体力作りからだな」
そう評されつつ。

亮が汗を拭いながら、軽く晏而を睨むと「まあ、しばらく見てやるからよ」とあしらわれてしまった。

悔しかった。

花を守ると言っても、亮には何の力もない。

当然、剣の腕は晏而や季翔に遠く及ばない。

孫子や六韜、三略を読んだと言っても、現実的には、花の目の前に危機が迫ったときに、亮の力では花を守ることが出来ない。

それだけじゃない。

ちよっとした意見なら出せても、この黄巾党を率いているという、花が背負っている重い責任を、ボクでは肩代わり出来ない。

人を死なせたくない、戦をなくしたいという花の想いを、肩代わりできないのなら、せめてそばにいて、その想いを一緒に背負いたい。

もっと強くなりたい。ボクは強くならなければ。急には無理なのだとしても、物理的な攻撃から花を守るぐらいには。

亮は背を向けた晏而に声をかけた。

「もう少し教えてよ」

「はあ？ とりあえずお前は少し休憩しろ。なんか顔色が悪いぞ」

ダメだ。明日にはまた戦になるかもしれない。いつ花が危険に晒されるかわからないのだ。

少しでも強くならなければ。

「晏而、お願い」

亮がなおも言うと、晏而はため息をついた。「しょうがねえなあ」そう言いつつ、彼はまた棒を握る。

亮も棒を手にとろうとした。

けれど、急に亮の視界が暗くなった。身体が異常なほど、傾いた気がした。

あれ。どうしたのでろう。

晏而が慌てた声で「おい、亮！」と叫んでいる。その声